僕は村人Aだった

ベン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕は村人Aだった

【Nコード】
N7664P

【作者名】
ベン

【あらすじ】
「ようこそ！シェルナの村へ」
そんなRPGでは、ありきたりの台詞を言う村人A。
平凡で普通で地味で、物語ではまず目立つ事の無い脇役であるはずの彼は、ほんの些細なきっかけで運命の歯車を大きく回してしまう。

プロローグ（前書き）

設定から書きはじめたので、展開を大まかにしか考えてません。
グダグダになるかもしれませんがよろしくお願いします。

プロローグ

「ようこそ！ここはシェルナの村だよ」
遠く離れたマリの町から来る行商人達に、僕は明るく声をかける。はたから聞いていれば何を当然のことを言っているんだろうと疑問に思うかもしれない。
だがこの一言を聞いた行商人達は、長く辛い旅路からようやく一息つけると顔を緩ませるのだ。
そんな彼らの顔を見るのが、僕の密かな楽しみだった。

「ああ、ようやく着いたか……」
行商人は酷く疲れた様子で一人つぶやく。背中の積荷が軽く塗れていたらしい後があるから、おそらく山むこうの雪道から来たんだろう。
「途中の雪道は大変だったろう？宿はあっちにあるから、早く行って一休みするといいよ」
「教えてくれてありがとう。ところで、君は？」
「僕かい？僕の名前はアルバート。この村一番の粉屋の息子さ」
僕は笑って返事を返した。

ここはシェルナ。
山と山の間の隙間を縫うようにして出来た、小さな村。
国の国境が近いせいもあって、多くの行商人が山越えの中継地点としてこの村を利用する。
村自体に目立った特産物は無く、少しの村民と少しの家畜、少しの蓄えで細々と平和に生活を営んでいる。

僕はそんな村の、平凡な粉屋の息子。

つまるところ、村人Aだった。

村人的日常

早朝。
ツンとした冷たい空気の中、山の端からほんのりとにじみ出るオレンジ色の光を頼りに、この村の一日は始まる。

粉屋の朝は早い。
特に僕の家は、粉を売る以外にもいろいろ商売の兼業をしてるので村でも忙しい部類だった。

５ｓｔ（シト。重さの単位。ｋｇのこと）の粉が入る大袋を荷車に乗せ、僕は水車小屋へと向かう。

シェルナは、前にも言ったとおり山間の小さな村だ。
だから交通の便が良いとはとても言えないが、そのかわり山の幸や河川に恵まれていた。
なので粉引きなどの動力源はもっぱら水車に頼っている。
といっても段差の多い土地柄、農作物としての小麦はあまり多くはないのだけれど。

道中の高台から、僕はふと村を見渡す。
村は深く濃いもやに覆われていて、村全体を覆い隠している。ぼんやりとした白い海のように。
山の隙間をぬって吹き込む冷たい北風はぴりりと僕の肌をさし、もやの海に少しずつ波を立てる。
やがてもやの幕が薄くなり、村の全容がおぼろげに見えた頃。
山と山の間から、ようやく太陽が産まれ出るのだった。
日の光は白い幕を照らし、村を金色に染め上げる。

まるで、神様の祝福に包まれたかのように。
僕は目を瞑って祈りの言葉をつぶやく。
「母なるアルビスの女神よ。国土より給(たま)いしあなたのお恵みに感謝いたします」
神々しい村の姿を感じながら、国の守り神に祈りをささげるのはいつもの日課だ。
早朝の限られた時間にしか見れないこの風景を、僕は父から教わった。
父も祖父から教わったらしい。多分粉屋に代々伝わる穴場なんだろう。
僕も、いつか自分の息子にこの風景を教える事になるんだろうな。
「さて、やるか」
荷車を押す腕に力を込め、僕はまた水車小屋を目指す。
まだまだ、仕事は始まったばかり。

※

水車小屋の大方の仕事を終え、村のほうに戻った頃には太陽は真上に上り始めていた。
「うわ、大分時間かかったなあ」
村のほうは一仕事終えて、昼の休憩に入ったらしい大人たちがちらほらと見える。良いなあ、僕も早く休みたい。
荷車を大きくきしませながら、善は急げとばかりに僕は店に戻った。
「父さん、ただいま……ってあれ？」

扉を開けると、そこには見覚えのある顔があった。
「君は……、確かアルバート君、だったかな？」
大きな鞄を背負い込んだ、あごヒゲを蓄えた中年の男。
昨日村にやってきたばかりのあの行商人だった。
「おじさんさっそく商いに来たんだね。昨日教えた宿屋は大丈夫だった？」
「ああ、なかなか快適で助かったよ。ありがとう」
「どういたしまして」

僕は笑顔で返事をすると、荷車に積んでおいた粉袋を早速店に入れる。
店のカウンターには短く刈り込んだ茶髪の男性、つまり僕の父さんが叱るような顔つきで僕を見る。
「アル、お客様とお呼びしなさい」
静かで重低音の声が一言だけ響いた。話好きの僕とは違い、あまり無駄なことを話さない人なのだ。
僕はすぐに失礼しました、と行商人のおじさんに頭を下げた。

「いや、そんなに固くならなくてもいいよ。おじさんなのは事実だからね。それに私も君みたいな態度のほうが話しやすいさ」
「あはは、ではお言葉に甘えて」
僕はすぐに先ほどの軽い調子に戻す。父さんが難しい顔をしているのは見ないフリだ。

「おじさん、今日は何を売りに？」
「隣国から取り寄せた珍しい香辛料を持ってきたんだ。味見してみるかい？」
おじさんは背中の荷を解くと、中からいくつも皮袋を取り出す。

袋を一つ手渡され、中をのぞくと、そこには乾してしわしわにな
った赤く細長い木の実が入っていた。
「パチクというんだ。ほれ、一口」
おじさんは木の実を一つ取り出し、二つに折って片方を僕に手渡
す。
「ありがとうございます。……、辛っ！？」
一口かじると、ピリリと痺れるような辛味がした。
「ハハッ、良い反応だ。これは保存食に使うと良いらしい。かなり
南のほうではこれを主食にしている地域もあるらしいよ？」
ジンジンと辛味の余韻が残る口を手で押さえながら、僕は余った
パチク片を見つめる。
……主食にするなんて信じられないような味だ。
「でも、料理のアクセントにはよさそうな味ですね」
「お、分かってるね。これとセルを使った肉料理の炒め物は最高だ
よ。どうだ、一つ仕入れてみてはくれないか？」
おじさんは父さんに目配せをする。父さんはパチクを見て黙った
ままだ。

「アル」
少し間を置き、父さんは僕の名前を呼ぶ。
「分かったよ、父さん」
僕は、おじさんの方に向き直った。

「おじさん、これは乾物だから保存はかなり効きますよね。どれく
らい保存できるんですか？」
「あ、ああ。だいたい一年は余裕だな。こいつはカラカラに乾燥さ
せてあるから、乾燥した日陰に置いておけば相当持つ」
「なるほど。じゃあ、５００ｔ（トール。重さの単位。ｇのこと）
お願いできますか」

「おお、まいど。代金は６０００ギド（通貨単位。１ギド＝１円）だ」
　僕は思わず顔をしかめた。
「高い。ボリすぎですよ。ここから隣国までの手間賃考えてもそれの半値が妥当だと思うんですけど」
　今度はおじさんが顔をしかめる番だった。
「おいおい、こっちは死にそうな思いであの雪道を渡ってきたんだ。値段相応だ」
「だからってこの値段は高すぎ――」

　僕とおじさんはお互いに値踏みをし始める。
こういった光景は、この店では日常茶飯事だった。
偏狭な場所にある村なので、通常の相場を知らないと踏んだ行商人達は相当な値段を吹っかけてくる。今みたいにある程度値引かないと割りに合わないことがままあるのだ。

　いつもは父さんが交渉するのだが、今回は全部僕に任された。
父さんが僕を名前だけ呼ぶときは、僕に任せるという合図だ。
粉屋を継ぐための修行の一環らしい。最初は不安だったけれど、何かを任せてもらえるというのは認めてもらえてるようでやっぱり嬉しい。

　しばらくして。
「……負けたよ。４０００ギドで持ってってくれ」
「どうもありがとうございます」
　疲れた顔をしたおじさんから、僕は確かに５００ｔの乾燥パチクを受け取る。今回の交渉はなかなか上手くいった。乾燥パチクを倉庫に入れてこようと僕はいそいそと店の奥にいこうとし――、
「ところで、アルバート。君は勇者の噂を知ってるか？」

行商人のおじさんの、突拍子も無い発言で歩みを止めた。
「勇者、ですか？」
その時、僕ははたから見ればかなりマヌケな顔だったと思う。
「そう。最近帝都の方で絶賛捜索中だそうだよ」
「また大層な話で……。なんですか、まさか魔王でも出たんですか？あはははは」
「そのまさからしい」

流石に、僕も乾いた笑いを続けることが出来なかった。

「しかもこれはアルビスの国の話だけじゃない。中央の大国ヴェルステアや南国ペラギア、この世界に存在する６大国中３国がそろいもそろって勇者捜索中ときてる。傍目から見ればどこも平和に見えるが、かなりまずい事になってるんじゃないかって話だ」
「はぁ……」
なんともとぼけた返事しか出来なかった。
僕個人からしてみれば、勇者も魔王もおとぎ話の存在だ。この世界に魔界がある訳でも悪魔がいるわけでもない。
魔法みたいな力はあっても、完全に論理化された技術だからなんでもできるわけでもないし……。
一介の粉屋である僕には関係の無い、縁遠い話だとしか思えなかった。

「父さんはどう思う？」
僕はカウンターの傍にあるイスに座った父さんを見る。父さんは難しい顔でじっと黙っていた。
多分、父さんも反応に困っているのだろう。
「二人ともずいぶん反応が悪いね。アルバートは勇者に憧れたりは

しないのかい？」
「僕は一介の粉屋ですし、勇者なんておこがましいですよ。それに……」
「それに？」
「選ばれても、多分すぐに死んじゃいます」
おじさんが大きく笑った。大分つぼに入ったらしい。
「なるほどね、確かに私もその気持ちは分かるよ。僕らの武器は商売道具と口先だからね。剣なんて一生握らないほうが良いのさ」
「ですよね。何かを殺すなんて僕には一生無理だと思います。せいぜい粉塗れになって生きてきますよ」
「それがいい」
「はい」
おじさんがひとしきり笑った後、店の扉に付いていた鐘が鳴った。誰か来たらしい。
「じゃあ、私はこれで」
その鐘を合図に、おじさんが客用の席を立ち上がる。
「あ、おじさん。一つ聞いても良いですか？」
僕はあわてておじさんを引き止める。
「ん？なんだい？」
「おじさん、名前はなんて言うんですか？さっきから聞きそびれてて」
「ああ、そういえば言ってなかったね。私の名前はクライヴ。またよろしく頼むよ、若き商売人君」
おじさん、いやクライヴさんは軽く手をふり、店を出て行く。

時刻はもう、お昼をとっくに過ぎていた。

村人的日常（後書き）

時代考証が結構いい加減なので、あまり真に受けないよう注意してください。

パチクは言うまでも無く唐辛子のことです。

村人的親友

ようやく休憩に入った僕は、お昼の弁当を持って外に出て行く。
お昼と言っても間食の時間に近いため、村の人々は休憩を終えて働き始めている人ばかりだ。
他の人の仕事の邪魔にならないよう、僕は村はずれまで歩いていく事にした。
村の端にあるうっそうとした木立を抜け、川沿いに歩いていくと、そこに目的の場所がある。
深い紺碧の色をした、美しい湖がそこにあった。
湖は美しさもさることながら、村にとっては重要な要でもある。生活用水や水車小屋を動かす川の本流は、この湖から来ているのだ。
村はこの湖とともにあるようなものだった。
もちろん生活以外にも娯楽の場としてもよく使われていて、村民の憩いの場でもある。
今日は時間が時間なので誰もいないけど――、

「あれ？」

湖の浜辺に誰かいるのが見える。目を凝らし、その人物が誰か分かった僕は大きく手を振る。
僕の良く知る人物だった。

「フレデリック！」
「……アルバート？」

僕はフレデリックと呼んだ青年の下に駆け寄る。
フレデリックは後ろに一まとめにしている少々長く濃い金髪を軽くかきあげると、少し意外そうな顔で僕を見る。

「珍しいね、アルバートがこんな時間にここにいるなんて」
「少し商談に手間取ったんだ、これからお昼だよ。それより、驚いたのは僕の方だよ。こんな時間に人がいるなんて思わなかった。フレッド、仕事は良いのかよ？」
フレデリック、ことフレッドは肩をすくめる。
「いや、今日はむしろ忙しいくらいさ。夜は休めそうに無いから、今のうちに休んどけって」
「へえ、こんな寂れた村に物好きがいたもんだ」
フレッドは村唯一の宿屋の跡取り息子だ。僕がクライヴさんに教えた宿も、こいつの家の宿だったりする。
しかし、収穫祭のときくらいにしか埋まらない宿屋が忙しいとは珍しい。

「ほら、お前の連れてきたクライヴさん……だったけ、あの人が集団客を予約してくれたんだよ。各国を行商してるキャラバン隊だってさ。今日到着らしい」
「キャラバン？そりゃあ忙しくなるな。ってことは、クライヴさんもキャラバンの一員か。どうりで珍しいのを持ってるわけだ」
僕は一人納得してうなずく。あの後、パチクト以外にも沢山の珍しい香辛料を交渉していた。
しかし、キャラバンが来るんだったら商売の交渉はもう少し待てば良かったかかな。他の香辛料も比べてみたかったたし、惜しいことをした。

「ところでさ、アルはまたやるつもりなのか？　あの“ようこそ～”」
フレッドが茶化すように手を振るのを見て、僕は少し苦笑いする。あんな風に手は振ってないんだけどなぁ。
「もちろん。それが僕の一番の趣味だからね」
「本当に物好きだなぁ。変なのに絡まれるなよ。ま、いざとなったら俺が張り倒すけどさ」

フレッドはぐっと握りこぶしを作る。この親友は村で一番剣の腕が立つことで有名だ。
僕？　僕はフレッドと比べるとかなり頼りない。というかはっきり言って弱い。
粉を運んでいるので力はそれなりにあるが、殴り合いのケンカや剣術はからっきし。もともと何かを傷つけるほど乱暴でもないし、そんな度胸もないしね。ついでにセンスもない。良い意味で言えば頭脳派の部類だった。

僕は湖の水面に移った、僕とフレッドの姿を見比べる。

フレッドは、一言で現すなら物語の主人公のような人物だ。
一まとめにした濃い金髪にスラッとした長身、そして凛々しく整った白磁のような色合いの顔立ち。奥深く透き通ったエメラルドグリーンの瞳は金髪に良く栄え、顔つきの精悍さに一役買っている。
体格もほどほどに引き締まっており、おまけに正義感が強くて性格も良いときている。いかにも騎士道物語で主役を張れそうな感じだった。
対して僕は父親譲りのこげ茶色の髪に、痩せぎすで平均的な身長の体。けして不快ではないが少々童顔でどちらかといえば可愛いと言われてしまう部類の顔立ちに、母から貰った真っ黒な瞳。

うん、脇役だ。自分はまごうことなき脇役だ。村のそこらへんで歩き回ってる村人Aだ。ここまで差があると嫉妬を通り越して諦めがついてしまうものである。

「何変な顔して一人頷いてるんだよ、アル」
「現実について再認識してたんだよ、フレッド。あ、そうだ」

僕はクライヴさんから聞いた噂話をフレッドに振ってみる事にした。

「フレッドはさ、勇者とか興味ある？」
「勇者？　またずいぶん話が飛ぶな」
フレッドが少しいぶかしげな顔をする。
「ちょっと面白い話を聞いてね」
僕はクライヴさんから聞いた一部始終をフレッドに話すことにした。

「へぇ……。アルビス様だけじゃなく、ヴェルステアにペラギアもなんて奇妙な話だな」
「うん。魔王も勇者もおとぎ話だとは思ってるけどさ、三国も動いてるなんて何か裏があるんだろうね。想像するだけで背筋がゾクゾクしてくるよ」
僕は薄く笑いながらフレッドを見る。冗談半分で言ったつもりなのに、フレッドは何か思うことがあるようだった。
「フレッド？」
「ああ、うん。ちゃんと聞いてるよ。確かに魔王も勇者もおとぎ話に決まってるよな」
少し考えこんでいるようで、返事に歯切れが良くない。少し気まずく思い、僕は話の矛先を変える事にした。

「フレッドなら、勇者になれそうじゃないか？　お前そういった主役オーラあるし……」

「冗談はよしてくれよ」

フレッドは笑顔で答えてくれたが、目は笑っていなかった。

どうやら僕は、地雷を踏んでしまったらしい。

なんだか変な空気になってしまった。僕は別の何かを切り出すべきか迷い、止める。こういうときはフレッドの方から話を変えてくれたほうが上手くいくからだ。

「……俺はさ、勇者は興味ないかな。この剣の腕だって、用心棒代の経費削減の為だしさ。たまに村の厄介ごとに担ぎ出されて、爺さんやばあさん達にアルや村のチビ達守れれば、それが一番良いや」

勇者にならなくても、何かは守れるんだよ――。

そうフレッドは一人ごちると、またいつもの明るい調子で別の話題に切り替える。

昨日は酒場から酔っ払いがケンカを売ってきたから返り討ちにしたとか、クライヴさんの荷物を運ぶとき、やたらとスパイシーな香りに溢れてたとか、ごくごく普通の会話。

そんな話をしているなかでも、僕はさっきのフレッドの言葉が頭から離れなかった。

どうして、あんな言葉を言ったんだろう。

疑問だけが残るばかりだった。

どうにも味気ないフレッドとの昼食を終え、僕はまた粉屋へと戻っていく。
あと二時間ほどで、フレッドの言っていたキャラバン隊が到着する予定らしい。
後でまた、村の入り口で待ち伏せをしよう。

今日はどんな人と会えるのか楽しみな半分、さっきの会話を引きずっているのが半分。

「変わるわけ、無いのになあ」
一介の宿屋の息子が何故あそこまで勇者の話に反応したのか、僕はその時その理由を知るよしも無く。
これからもこの日常は続くと、ただ信じきっていた。

そんな根拠、あるわけ無いのに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7664p/

僕は村人Ａだった

2011年10月8日02時30分発行